

曹丕・曹植と道家思想

Cào Pī (曹丕)・Cào Zhī (曹植) and their Taoism

清宮 剛

『三国志・魏書・武文世王公伝』によれば、曹操は十四人の女性によって二十五人の男子を生んでいる。長子は曹昂である。生母の劉夫人が早く死んだために、曹操の最初の正夫人である丁氏によって育てられた。彼は建安二年（一九七）、張繡との戦いで身代わりとなって死んだ。これを恨みとした丁氏は実家に帰り離縁された。代りに正夫人となったのが卞氏であり、曹丕・曹植の母である。長男が曹丕、三男が曹植であり、この時丕は十歳を過ぎ、植は六、七才の頃であった。次男は曹彰という。男子二十五人のうちで才能に恵まれたのはこの三人と環夫人の生んだ曹沖という人物であった。曹沖についてはその聡明さを伝えるいくつもの逸話が残っているが、残念ながら十三才で死んでいる。残った三人、曹丕、曹彰、曹植が曹操の最も期待する子供たちであり、彼らは曹操の優れた面をそれぞれに受け継いでいる。

曹操の武人としての性格を受け継いだのは二男の曹彰である。曹操は彼が武芸にばかり熱中して学問に興味を示さなかったので、『詩経』や『尚書』を読むことをすすめたが、学問には関心を示さなかった。ある時曹操は子供たちに将来の希望を述べさせたところ、曹彰の答えは次のようであった。

好為将、太祖曰、為将来奈何、对曰、被堅執锐、臨難不顧、為士卒、賞必行、罰必信、太祖大笑。（『魏書・曹彰伝』）

長じて後、彼はこの日の言葉を実現した。建安二十三年、烏桓の戦いでは勇猛な戦いをし、しかもその功を誇らぬ名将となった。

曹彰は勇敢な武将であったが、曹操の後継者となるにはなお不十分であった。君主としての度量、政治的才能は史書からは読みとれない。曹操の後継者争いは長男丕と三男植で行われることになり、これが二人の悲劇となった。

曹操の政治家としての才能を受け継いだのは長男曹丕である。

曹丕は後漢靈帝の中平四年（一八七）に曹操の故郷である誰で生まれた。曹操三十三才の時である。彼の伝記は『三国志・魏書・文帝紀』に詳しいが、幼年から青年にかけての伝記はその注に引かれる曹丕自身の自叙伝「典論自序」に詳しい。それによれば、彼は五歳で弓を習い、六歳で乗馬を覚え、八歳で馬上の射をよくした。さらに多くの師について剣術を習い、かなりの腕前であったことが記されている。「自序」は武事に関する自身の言葉が多く述べられているが、文事についても父曹操の教えにより、『詩経』『論語』を早くから暗誦し、長じて後は五経、四部、史漢、諸子のことごとく目を通して述べている。

武事、文事ともにすぐれた能力を有していたことを物語るものである。

『文帝紀』本文にはいう。

初帝好文学、以著述爲務、自所勒成垂百篇。

陳寿は彼を評している。

文帝天資文藻、下筆成章、博文彊識、才芸兼該。

いずれも曹丕が学問的に優れた人間であったことを証する文である。

その才能を活かして彼は実務型の人間として成長した。現実在即した判断と行動、政治家としての手腕が後の実務型君主にふさわしいものであり、その政治的才能を曹操から受けついだのである。

曹操の詩人としての才能をより多く受け継いだのは曹植である。彼の伝記は『三国志・魏書・陳思王伝』に詳しいが、それによれば、十余歳にしてすでに詩論および辞賦数十万言を誦読し、善く文を作ったという。曹植の文章を読んだ曹操が誰かの代作かと聞いたのに対し曹植は次のように答えている。

言出為論、下筆成章。顧當面識、奈何情人。

文人としての自信が強く述べられている。

彼の性格について陳寿は次のようにいう。

性簡易不治威儀、輿馬服飾不尚華麗。

つまり率直な性格であり、堅固しくなく、乗り物も衣服も飾ることがなかったというのである。陳寿はさらに続ける。「毎進見難問、応聲而対、特見寵愛。」父の面前で、てきぱきと質問に答えたために特に寵愛されたのである。曹操自信も曹丕、曹植のどちらを世嗣ぎにするかはかなりの迷いがあつたようである。「太祖狐疑、幾為太子者数矣」の文がそれを示す。曹操の迷いは家臣達をもまき込んでゆく。曹丕の下には曹詡・崔琰・呉質・桓楷らが集まり、曹植の下には丁儀・丁廙・楊脩・邯鄲淳らが集まつた。二つのグループは自分達が推す方を有利にしようとするさまざまな画案が行われた。そしてこの後継者争いは兄曹丕が勝者となり弟曹植が敗者となつた。その原因は曹植の奔放な性格にあつた。「植任性而行、不自雕勵、飲酒不節」かつて気ままなふるまいや酒に溺れる性格は太子となるには不都合であつたのだ。これに對

し曹丕は「文帝御之以術、矯情自飾」と記されるように、自らを抑え太子となるにふさわしいようにふるまつたのである。曹植の気ままなふるまいは「陳思王伝」にいくつか伝えられている。たとえば王宮の司馬門をかつてに開けて曹操のみに許されていた専用道路に馬車を走らせ、担当の係の者が責任を取つて殺されている。さらに建安二十四年、曹植は決定的な失敗をした。樊城で関羽の軍に包囲されていた曹仁の救援のために曹操は曹植を派遣しようとしたが、その命を受けることもできないほど曹植は泥酔していたのである。曹丕が計画的にむりやり酒を飲ませたのだという説もあるが、事実ではあるまい。建安二十二年に曹丕が太子となる。

建安二十五年正月、曹操が亡くなると曹丕がその後を継ぎ体制を整えて行く。曹丕派であつた曹詡・呉質らは高い官位を与えられ、曹植派であつた丁儀・丁廙は殺されてしまう。同年十月には曹丕は漢の帝位を「禪讓」という形で奪い、魏王朝を成立させた。

勝者となつた兄曹丕は以後弟を徹底的に迫害した。『世説新語』には、曹丕が曹植に向つて七歩の中に詩を作れ、もしできなければ殺すと言つたのに答え、ただちに曹植が作ったと言う「七歩詩」を収める。

煮豆持作羹 漉豉以為汁

其在釜下燃 豆在釜中泣

本是同根生 相煎何太急

曹植の作であるかどうかは疑わしいが、こうした詩が作られるほど両者の間には憎しみが生じていたのである。

側近を殺され力をそがれた曹植は以後死ぬまで、しばしば封地を変えられ厳重な監視の下に置かれた。やがて文帝曹丕の死後もその子明

帝によってたびたびの転封を強いられ、四十一歳で亡くなった。

〔一〕 曹丕の道家思想

曹丕の道家思想は政治的な面と文学的な面の二面からみることが可能である。

曹丕は曹操の死んだ建安二十五年（二二〇）に即位し、黄初七年（二二六）に没しているから、実際に政治を担当したのは七年間にすぎない。この七年間で彼は父曹操の政治的経済的事業を継承したが、それを拡大させることはしなかった。彼の政治について『三国志魏書・文帝紀』の注に引く『魏書』には興味深い文がある。

常嘉漢文帝之為君、寛仁玄默、務欲以德化民、有賢聖之風。

さらに同書に引く『太宗論』では

乃弘三章之教、愷悌之化、欲使曩時累息之民、得潤歩高談、無危懼之心。

と述べている。

これらの文によれば彼は前漢の文帝の無為の政治を理想としてそれをならおうとしたことが解る。文帝の時期は前にも述べたように黄老思想による無為の政治が称讃された時代である。無為にして徳を施し、民衆を教化する政治こそが曹丕が望んだものであった。曹操は乱世を治めて魏国の基礎を形成した人間にふさわしく、きびしい法治主義をもって政治に臨んだが、曹丕はその欠点を補おうとしたのである。曹操と曹丕の政治の違いについて傳玄は「近者魏武好法術而天下貴刑名、魏文慕通達而天下賤守節」（『晋書・傳玄伝』）と明確にその差を指摘しているが、この「通達」の内容は文意から察するなら、無為の治

を意味している。

この他にも曹操との政治の違いは、刑罰を緩やかにすること、民衆の負担を軽くするために賦役や税金を少なくしたこと、仇討ちを禁止したこと、節約につとめたことなどが挙げられる。これらも無為の治の延長と考えてよいであろう。陳寿は曹丕の政治について次のように評を加えている。

文帝天資文藻、下筆成章、博文彊識、才芸兼該、若加之曠大之度、勵以公平之誠、邁志存道、克廣徳心、則古之賢主何遠之有哉。

昔の聖王のようになるには、度量が小さかったというのである。無為の治は確かに一定の効果は挙げたであろうが、やはり積極性に欠けるところがあったのかも知れない。

次には文学における道家思想との関係であるが、これはそれほど大きくは見えない。ただ道家思想との関係に入る前に触れておかなければならないことがある。それは曹丕には『典論』という著作があり、五巻と伝えられているが、本来の形は早くから失われた。『典論』の一篇である『論文』が『文選』に引かれており、最も古い文学理論の著として有名である。『論文』は、文学の価値の重視、「氣」を中心として文学創作の理論、「建安七子」の文才論と多岐の内容を含むが、ここでは文学価値の重視と「氣」と文学の関係について触れておこう。

蓋文章経国大業、不朽之盛事。年寿有時而尽、榮樂止乎其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。

曹丕においてはじめて文学の価値が経国の大業であることが宣言されたのである。ここにいう文章とは、これに続く文に「故西伯幽而演易、周旦顯而制礼、不以隱約而弗務」

とあることから考えて、「易」や礼制までも含んでいるようであるが、「建安七子」の文の批評もされている点からして、広義の文章概念として用いられている。その中の主要なものとして今日的な狭義の文学作品の文章があったと考えるべきである。そのような曹丕の文学価値の重視、文学に対する認識の新鮮さは、これまでになかった文学の独立の立場を確立しようとするものであった。

次には文学創作理論と氣の關係について、曹丕はどのように考えているのであろうか。

文以氣為主、氣之清濁有体、不可力強而致。譬諸音楽、曲度雖均、節奏同儉、至於引氣不齊、功拙有素、雖在父兄、不能以移子弟。

この場合の文は韻文、散文を含んでいるが、作家の内面にある「氣」が作用して文学が生まれるという理論である。「氣」は中国思想において重要な概念であるが、その意味は時代的にも変遷し、複雑な内容を有する。ここでは個人的な才氣という意味が妥当であろう。文章はもっぱら作家の個性的な才氣をもととして成立するものである。曹丕は人間の氣に清濁があり、それは努力しても変えられないものであるとしている。音楽にたとえれば曲譜やリズムが同じでも、演奏する人間の引氣（呼吸）が同じでなく、生まれつきの巧拙があるのだから、父兄、子弟でも秘訣を伝授することはできないというのである。

この氣を文才、文体論にあてはめれば、作家には、生まれつきの才氣があるのだから、それにふさわしい文体を選ばなければならないということになる。『典論』で言及している「建安七子」の評価、あるいは『与吳質書』の中での彼らの評価もこれらを基本としてなされている。

以上曹丕の「氣」を基本として文学創作理論である。

さて曹丕の詩は現在四十首ほどが残されているが、道家との関連を思わせるものは少ない。少ない中にもいくつかの詩を取り上げ、道家の影響を探るのは可能である。

まず『善哉行』を見てみよう。

朝日染相染 酣飲不知醉 悲絃激新聲 長笛吐清氣 絃歌感人腸
四坐皆歎悅 寥寥高堂上 涼風入我室 持滿如不盈 有德者能卒
君子多苦心 所愁不但一 慊慊下白屋 吐握不可失 衆賓飽滿歸
主人苦不悉 比翼翔雲漢 羅者安所羈 冲靜得自然 榮華何足為

曹丕の詩の中で游宴詩という分野のものである。『芙蓉池作詩』『于玄式陂作詩』『夏日詩』のように公子として優雅な生活を送っていた時代の作品である。これらの詩には当時の生活をそのまま写したものが多し。この『善哉行』もそうであるが、詩では游宴の盛況さと歓娛の場面が生きて描かれている。しかし、この詩の最後の二句「冲靜得自然榮華何足為」は、道家的な心情を述べたものに他ならない。「冲靜」とは淡泊寧靜の意であり、そういう心境であってこそ自然が得られる、現在の榮華は取るに足りないものだといっている。曹操の長子として五官中郎將となり、建安二十二年以後は魏の太子となった曹丕が内面での自由な生活を願っていたことの表現であろう。

また游宴詩はもう一つの特徴を有している。それはこれらの詩が游宴や娯しみの極力述べた後で、生命の悲哀を述べる言葉で詩を終っていることである。「樂極哀情来・寥寥摧肝心」（『善哉行』）、「壽命非松喬、誰能得神仙、遨游快心意、保已終百年」（『芙蓉池作詩』）などがその例である。前に引用した『善哉行』の最後の二句もこの延長にある。

ものとして理解されなければならないし、生命の愛惜という点からすれば道家思想の影響ともいうことができる。

次には『煌煌京洛行』をみてみよう。この詩は、古人の得失成敗を論じて作者の政治や人生に対する見解を述べたものであり、作者の尊ぶ人間像として、功成り身退く人を挙げている。詩の最初にいう。

天天園桃 無子空長 虛美難假 偏輪不行 淮陰五刑 鳥盡弓藏
保身全名 独有子房

後半は漢の功臣である韓信と張良のことを述べたものである。韓信は高祖劉邦の開国の功臣であったが、後に謀反の罪によって呂后に殺されている。彼はかつて、「狡兔死、走狗烹、高鳥盡、良弓藏、敵国破、謀臣亡。天下已定、我固當烹」（『史記、淮陰侯列伝』）といったことがあるが、句はそれをもととしてのものである。子房とは漢の開国の功臣である張良の字である。後に留侯となった人であるが、彼は以後世事に関心を示さず、次のように言った。「公以三寸舌為帝者師、封萬戶、位列侯、此布衣之極、於良足矣、願棄人間事、從赤松子遊耳」（『史記、留侯世家』）。かくして張良は保身を全うできたのである。張良の「功成身退」という処世観はまさに道家的なものであり、曹丕もまたこのような生き方を理想としていたのである。

曹丕には『大牆上蒿行』という詩が残されており特色あるものである。短句・長句が混在しており、内容的にも漢賦に似たものである。この詩は隱士に出仕を勧めるという内容のもので、最初に四時草木を描写し、人生の短さを強調して隱士が隱居をせずに「応及時行樂」と勧める。その後宝剑を磨き、服飾の華美、宮室、女樂など出仕生活の快樂を述べ、隱士が山から出てくることを誘う形式となっている。詩

中には次のような表現が見える。

人生居天地間 勿如飛鳥棲枯枝、我今隱約欲何為、適君身体所服、
何不恣君口腹嘗、冬被貂鼯温暖 夏當服綺羅輕涼、行力自苦 我將
欲何為

引用は一部だけであるが、この後も宮室、女樂の楽しみが次々と述べられ、隱者を山から誘い出そうという構成になっている。この詩の主張は前にも述べた通り、人生は苦しく短いことから、時に及んで行樂すべきだというものである。道家思想は淡泊寧靜、清心寡欲によって性を養おうとするものであるから、この詩の主張するところは道家と相反するものである。しかし個体生命の愛惜と重視は曹丕の意識下で道家思想の影響を受けていたと考えることができる。

〔二〕 曹植の道家思想

曹植の文学作品については彼の生涯と重ね合わせて前期と後期に分けて考えるのが一般的である。つまり建安二十五年（二〇〇）年を境として二期に分けるのである。この年に父曹操が死に、曹丕は跡を継いで魏王となり、その年のうちに後漢の献帝に禅譲を迫って魏の文帝となった。弟曹植は二十九歳であったが、以後四十一歳の死を迎えるまで暗い人生を送ることになる。

曹丕は文帝となると、曹植の側近である丁儀と丁翼兄弟を殺し、徹底的に曹植を迫害した。それまで臨菑王とはいっても領地に赴くことなく都で貴公子の楽しみとしていればよかったが、曹丕の政策により実際に領地に行かなければならなかった。しかも監国使という監視役の役人が同行し、厳しい監視の下に置かれたのである。『三国志、陳思

王伝』によれば、以後安郷王、鄆城王、雍宮王、東阿王、陳王と転々と封邑地を変えさせられた。それぞれの封邑地での生活がいかに苦しかったかは、彼の『遷都賦』でも次のように歌われている。

余初封平原、転出臨菑、中命鄆城、遂従雍丘、改邑浚儀、而未将適于東阿、号則六易、居実三遷、連遇瘠土、衣食不繼。

〔全三国文〕

『全三国文』ではさらに『文選・曹大家「東征賦」注』を引用し、次のようにいう。

與禽獸乎無別、拯蠱螫而食蔬、撫皮毛以自蔽。

以上のような経済的な苦しさとともに、曹植を悩ませたのは孤独の感情と、いつ兄である曹丕に殺されるかという死の恐怖であった。

曹植が鄆城王であった頃、前に触れた曹操の二男である曹彰が死んだ。一説では彼の勇猛を恐れた兄曹丕が殺したともいわれる。

やがて黄初七年（二二六）文帝が病死し、その子曹叡が即位して明帝となったが曹植の苦しい生活は変わることにはなかった。太和四年（二三〇）には彼の最大の庇護者であった母の卞后が亡くなった。その後二年、太和六年（二三〇）に曹植は四十一才で病死している。

これまで少し詳しく曹植の後半の人生について述べたが、これらの悲痛な人生の中で彼の道家思想が芽生えたことを知っておく必要があるからである。彼の道家思想はこのような環境の中から生まれて来たものであるが、それと対称する意味で彼の前半期の文学を見ておこう。曹植の前半期は輝かしいものであった。曹操の次男として鄴に生まれ戦乱の中で成長した。父曹操は彼をよく戦争に同行させ、政治的責任感を身をもって教えた。文学の才能も父を満足させるに充分なもの

であった。そのような時代の作品は俠気を含んだ「拯世済物」に代表される儒家思想が中心となっている。代表的な作品として『白馬篇』と『名都篇』が挙げられる。『白馬篇』の第二首には次のようにいう。

辺域多警急 胡虜数遷移
羽檄從北来 厲馬登高提
長驅蹈匈奴 左顧凌鮮卑
棄身鋒刃端 性命安可懷
父母且不顧 何言子与妻
名編壯子籍 不得中顧私
捐軀赴国難 視死忽如歸

『曹魏父子詩選』（趙福壇選注・遠流出版）によれば次のような解釈がつけられている。

本篇可能是写遊狭以自況。詩中的遊俠兒武芸高超、勇猛機智、忠貞愛國、視死如歸。这和作者以国事為念、經常想立功塞的抱負頗相同。曹植のこのような愛國の志は彼が迫害を受け、政治的な活動ができなくなった後半においても変えることはなかった。彼は死の四年前の太和二年（二三〇）に明帝に対し『求自試表』を上疏しているがその文の中で次のようにいう。

若使陛下出不世之詔、效臣錐刀之用、使得西属大將軍、當一校之隊、若東大司馬、統偏舟之任、必乘危蹈險、騁舟奮驪突刃触鋒、為士卒先、雖未能禽權賊亮、庶將虜其勇率、殲其醜類、必效須臾之捷、以滅終身之愧、使名挂史筆、事列朝策、雖身分蜀境、首縣吳関、猶生之年也、

彼は常に有能な才能を持ちながら、その才能を用いるべき所がない

ことを嘆き、怨んでいたためにこのような文を書いたのである。このように彼の愛国と政治への参加の希望は晩年に至っても変わることはなかったが「求自試表」が苦悩の中で書かれたのと違い「白馬篇」は、そういう苦悩とは全く関係のない若い時代にかかれたものであり、純粹な理想として述べられたものである。

曹植の若い時代の作品として挙げなければならないのが次の『名都篇』である。その後半には次のように歌う。

归来宴平乐 美酒斗十千
膾鯉膾胎鰕 寒飈炎熊蹯
鳴鸛嘯匹侶 列坐竟長筵
連翩擊鞠壤 巧捷惟万端
白日西南馳 光景不可攀
雲散還城邑 清晨復來還

この詩には洛陽の貴族の子弟の遊びがいきいきと描かれている。曹植自身は洛陽の都で遊んだことはない。子供の頃は許昌から鄴に移り住んでいるから、鄴の町でも洛陽に匹敵する優雅な青年の遊びがあったのであろう。郭茂倩『樂府詩集』では、「刺時人騎射之妙、遊聘之樂、而無憂國之心也」と評しているが、そこまで考えることもなからう。

曹植の晩年の作品に『吁嗟篇』という詩がある。

吁嗟此軫蓬 居世何独然
長去本根逝 夙夜無休閒

風に吹かれるままに転々とする蓬にたとえて流転してやまない自己の運命を詠んだものである。根を離れて休む間もなく転々とする蓬は肉親との離別を悲しむ曹植の姿そのものである。詩の後半は次のよう

に結ばれる。

流転無恒処 誰知我苦難
願為中林草 秋随野火燔
糜滅豈不痛 願与根亥連

定住すべき所を持たない苦しみを誰が解ってくれようか。いつそう林の中の草となり、秋には野火に焼かれてもよい。焼かれるのはつらいが、もとの根株とつれ添えることを願うばかりだ。最後まで肉親との和解を望んでいた曹植の心情がよく描写されている。このような境遇の中で彼の道家思想との関わりは深さを増して行くのである。

曹植と道家思想の関係を述べるものとして『髑髏説』及び『釋愁文』が代表的なものである。

『髑髏説』は、曹植が歩いていると髑髏に会った。死の原因を尋ねると髑髏がよみがえって会話がはじまるという設定であり、『莊子・至樂』の有名な髑髏問答を意識しているものである。その会話の中で死生観について髑髏は次のように述べる。

夫死之為言歸也、歸也者歸于道也、道也者身以無形為主、故能與化推移、陰陽不能更、四節不能虧、是故洞于纖微之域、通于恍惚之庭、望之不見其象、聽之不聞其声、挹之不沖、滿之不盈、吹之不凋、嘘之不榮、激之不流、凝之不停、寥落溟漠、與道相拘、偃然長寢、樂莫是喩、（『全三国文卷十八』）

髑髏の説によれば死とは道に歸すことを言う。その道とはいうまでもなく『老子』に代表される根本存在のことであり、『老子』と同様の表現によって道が説明されている。生と死について深い認識を有し、それを道家の「反本」の思想をもって説明したものである。その後曹

植は天帝、司命に頼んで髑髏を生き返らせようとするが、髑髏は現在の幸福を述べて申しを拒否する。これも『莊子』と同様の展開である。

『釋愁文』も道家思想的内容に満ちた文章である。曹植が愁いのために病氣となった。その病いは「不召自来・推之弗往、尋之不知其際」というものであり、「加之以粉飾不澤、飲之以兼膏不肥、温之以火石不消、摩之以神膏不稀」という厄介なものであった。その病いに對し、玄虛先生が病の原因について次のように教えてくれる。

大道既隱、子生末季、沈溺流俗、眩惑名位、濯纓彈冠、諂諛榮貴、坐不安席、食不終味、遑遑汲汲、慘或悴、所嚮者名、所拘者利、良由華薄、凋損正氣（『全三国文卷十九』）

今は末世であり大道も行きづまってしまっている。そのような中で生まれ、しかも今の世はすべて功名利祿のために動いている。だからこのような病いになったのである。続いて玄虛先生は次のような処方を与えてくれる。

吾將贈子以無為之藥、給子以澹泊之湯、刺子以玄虛之釘、炙子以淳朴之方、安子以恢廓之宇、坐子以寂寞之牀、使王喬與子携手而游、黃公與子詠歌而往、莊生為子具養神之饌、老聃為子致愛性之方・・

（『全三国文卷十九』）

この処方と言うまでもなく、すべて道家的世界に身を委ねることにある。道家的世界を理解し、莊周、老聃、仙人たちとその行為をともにすることが一番よいというのであり、その処方後に曹植は「衆愁忽然、不辭而去」となったという。

兄文帝、甥明帝によつて徹底的に迫害され、世に出て貢獻しようとする志も実現できず、『吁嗟篇』のように風に転々とする我が身の苦悩

を、道家的世界の確立によつて自己を慰めようとしたところに曹植の道家思想がある。

曹植にはいくつかの游仙詩がある。『遠遊篇』『昇天行』『五遊』『仙人篇』『桂之樹行』などがその代表的なものである。それぞれの詩の中心的部分について考察してみよう。

『遠遊篇』の後半に次のようにいう。

崑崙本吾宅 中州非我家
將歸謁東父 一舉超流沙
鼓翼舞時風 長嘯激清歌
金石固易弊 日月同光年
齊年與天地 万乘安定多

『曹魏父子詩選』（趙福壇選注、遠流出版）ではこの部分を次のように訳している。

崑崙山本是我的住處、中原不是我的家 我將要歸去拜謁東王公、一展翅便飛越了 西部的沙漠、揚動着翅膀乘風起舞、一声長嘯、唱出悅耳的清歌、金石難堅亦易毀壞、我要和太陽月亮同放光輝、神仙的壽命同天地一樣長久、万乘之主也不值得羨慕。

『遠遊篇』の名が示すように、これは屈原の『遠遊』に倣つて作られたものである。其の製作動機もまた同じである。屈原の『遠遊』に王逸は「屈原履方直之行、不容於世、困於讒佞、無所告訴、乃與仙人俱遊戲、周歷天地、無不至焉」と注をしているが、曹植もまた文帝と明帝に憎まれ、苦しみの中にあつてこの詩を作つたのである。「崑崙本吾宅、中州非我家」、「齊年與天地、万乘安定

多」の句の中には、曹植が現実の憂いを超越しようとする感情が含まれている。全体としては屈原の『遠遊』の中の「悲時俗之迫阨、願輕拳而遠遊」という思想と合致するものである。

『五遊』もまた屈原の『遠遊』を倣ったものである。最初の部分のみを引用しておく。

九州不足歩、願得凌雲翔

逍遙八紘外、遊目歷遐荒

披我丹霞衣、襲城素霓裳

華蓋粉紈謁、六龍仰天驤

この後仙界のすばらしさが長文によつて描かれるという構成である。最初の「九州不足歩、願得凌雲翔」の発想は屈原『遠遊』の「悲時俗之迫阨、願輕拳而遠遊」の内容と同じものである。時世の中で自分の志が得られないことが前提となつての仙界への飛翔である。

『升天行』は二首あり、第一首は蓬萊の仙境を描いたものであり、第二首は扶桑の神樹を描いたものである。いずれも仙界のすばらしさを描いたものであるが、他の游仙詩と同様に特に思想的な内容は有していない。

『桂之樹行』も游仙詩の代表的なものである。「桂之樹」は『楚辭・招隱士』に「桂樹叢生兮山之幽」とあるものを意識して自己の隱居の情を寄せたものであろう。その辞に言う。

教爾服食日精、要道甚不煩、

淡泊無為自然、乘蹻萬里之外

去留随意所欲存、高高上際於衆外

下下窮極地天

「日精」とは朝霞のことであり、「要道」とは仙道を得る方法をいう。「淡泊」は恬靜寡欲のことであり『老子、三十五章』に「道之出口、淡乎其無味」、あるいは『同二十章』の「我独泊兮其未兆、如嬰兒之未孩」という語に基づくものである。「無為」「自然」の語も『老子』にしばしば出てくる概念であり、この詩が『老子』の思想に裏づけされたものであることを証明する。

以上が曹植の游仙詩の代表的なものである。いずれもが天界の自由さ、すばらしさを強調したものであるが、曹植がこのような世界に心を遊ばせたのは、『楚辭・遠遊』における屈原が、現実の社会に受け入れられない苦しみから天界へと飛翔した構図と同様である。曹植の遊仙もまた現実の苦悩の中からの止むを得ない飛翔であつたのである。彼は『贈白馬王彪』の中で「苦辛何慮思、天命信可疑、虛無求列仙、松子久吾欺」というように一面では神仙の世界を信じてはいなかった。この点からすれば「神仙」は単に題を借りたものにすぎず、そのことによつて志を得られない苦悩を発したものと解することができる。

引用文献

(1) 『三国志・魏書』武文世王公伝

上海古籍出版社『二十五史』所収

(2) 『三国志・魏書』曹彰伝

”

(3) 『三国志・魏書』文帝紀

上海古籍出版社『二十五史』所収

- (4) 『三国志・魏書』陳思王伝
上海古籍出版社『二十五史』所収
- (5) 『世說新語』文学
目加田誠『新釈漢文大系・世說新語』明治書院
- (6) 『晋書』傳玄伝
上海古籍出版社『二十五史』所収
- (7) 『文選』典論
廣文出版社
- (8) 『曹魏父子詩選』趙福壇選注 遠流出版
- (9) 『史記』淮陰侯列伝
宏業書局
- (10) 『史記』留侯世家
〃
- (11) 『全三国文』 中文出版社『全上古三代秦漢六朝文』所収
- (12) 『人間三国志』 5 林田慎之助 集英社
- (13) 『三国志実録』 吉川幸次郎 ちくま学芸文庫